帛書「経法」「十六経」「称」「道原」四篇の成立について

――「黄老」との関わりを中心に――

渡辺　大

一、はじめに

長沙馬王堆漢墓より出土した帛書「経法」「十六経」「称」「道原」の四篇（以下「帛書四篇」と略す）は、先秦から漢初における思想状況の一端を窺いうる貴重な資料として注目されてきた。[注一] これまで「帛書四篇」[注二]研究の中心的論点は漢初に流行した「黄老」との関連[注三]と、『漢書』藝文志内のどの著作に同定するかであった。また「帛書四篇」は一体をなす資料とみなされ、一括りに扱われてきたが、[注四] その成立地域・時期については諸説紛々として未だに定説を見るに至ってないのが現状である。[注五]

本稿では、このような先行研究をふまえつつ、その問題点を整理し、「帛書四篇」の資料的性格を明確にしたいと思う。その筋道として、まず「帛書四篇」は「黄老」と関連する資料であるが、その成立は必ずしも一人の手によるものではないことを論じ、つづいてその視点から「黄老」についても若干の考察を行いたい。

二、「帛書四篇」と『黄帝四経』

「帛書四篇」についての論考のうち、最も早く提出され、その後への影響力が大きかったものは、唐蘭「黄帝四経初探」[注六]である。この中で唐氏は「帛書四篇」を『漢書』藝文志の『黄帝四経』に同定した。四篇が『漢書』藝文志のどの書物にあたるかは、その後いくつかの説が出されたが、近年の大陸の研究動向では、この「黄帝四経説」が広く受け入れられている。[注七] 最近の陳鼓應「關於帛書《黄帝四經》成書年代等問題研究」[注八]においても「帛書四篇」を『黄帝四経』としている。陳氏はその根拠として、唐氏の説に沿って、次の四点を挙げている。

一、四篇中には黄帝とその臣下との問答文が収められ

ている。

二、四篇中「経法」と「十六経」の二篇の篇名には「経」の字が含まれ、体裁は異なるものの、思想的整合性[注九]があり、「経」と称するのにふさわしい。

三、『漢書』藝文志で『黄帝四経』のみが「帛書四篇」と篇数が一致する。

四、四篇が抄写された時期は、漢の文帝の初期に当たり[注十]、当時は「黄老」が流行していた時期に当たる。四篇は『老子』乙本の前に置かれており、それが「黄老」の体に一致する。

周知のように『漢書』藝文志には黄帝の名を冠したいわゆる「黄帝書」がみられる。藝文志に著録されている道家書、三十七種、九百九十三篇のうち、黄帝の名を冠するもの、または黄帝と関連のある書物は、次の五種、百篇である。

黄帝四經四篇
黄帝銘六篇
黄帝君臣十篇起六國時、與老子相似也。
雜黄帝五十八篇六國時賢者所作。
力牧二十二篇六國時所作、託之力牧、力牧黄帝相

また『隋書』経籍志には「漢時、諸子道書の流、三十七家あり。大旨は皆、健羨を去り、沖虚に處るのみ。其れ黄帝四篇、老子二篇、最も深旨を得たり」とあり、『黄帝四経(黄帝四篇)』が『老子』とともに重視された書物だったということがわかる。

では、陳氏の主張するように「帛書四篇」は当時の道家の中心的教典であった『黄帝四経』だとそのままいうことができるのだろうか。以下、陳氏の指摘する諸点について改めて検討してみる。

まず「帛書四篇」を『黄帝四経』とする根拠のひとつとして、帛書中に黄帝とその臣下との問答文があるということがあった。しかし、黄帝の名は「十六経」の一部にみえるだけで、その他の篇では黄帝の名は全くみられない。『黄帝四経』と断定するためには、この根拠はやや弱いのではないか。

次に篇名に用いられている「経」字については、「十六経」の「経」は、確かに「経典」の意味だが、「経法」の「経」は「つね、法則」等の義であり「経典」の意味ではない。「帛書四篇」全体を『黄帝四経』とするにはやはり論拠が弱いといわざるをえない。

さらに、四篇に思想的整合性があるとする点にも、疑問をもたざるをえない。従来の諸研究の主張するところから

しても「帛書四篇」中に多くの思想的共通点があることは否めない。しかし、唐氏、陳氏ともに認めているように、四篇の体裁の違いはかなり大きい。これを無視することはできないだろう。これを考慮に入れるなら、四篇はある一定の時期に統一的に構想・作成されたものではなく、むしろ別々に作成されたものが、後の時期に一ヶ所にまとめられたものと考えるほうが自然ではなかろうか。思想的共通点も、編集の段階において何らかの意図が働いたものとみた方が、やはり自然ではないだろうか。

次に「帛書四篇」が抄写された時期に「黄老」が流行していたということは、四篇が「黄老」と関連する資料とする根拠とはなりえても、四篇が『黄帝四経』である積極的根拠とはなりえない。『老子』乙本の前におかれていたということも同様である。「黄老」が黄帝と老子の併称であるからには、当時、多くの黄帝に関する書物が『老子』と並んで行われていたとみる方が自然であろう。

となると陳氏の根拠のうち「帛書四篇」と『黄帝四経』を直接結び付けるものは、両者の篇数の一致という点だけとなる。しかし、この点についても『漢書』藝文志の成立状況を考えれば、必ずしも十分な根拠となりえない事がわかる。

『漢書』藝文志は劉向・劉歆父子の行った図書整理事業の成果である『別録』・『七略』をもとにしている。『七略』の成立は哀帝の初頭（西暦紀元前後）とされているから「帛書四篇」抄写後約百八十年のものである。『別録』の逸文によれば『七略』は単なる宮中の蔵書目録ではなく、劉氏は、その編纂過程において、広く異本を集め、刪削編集し、時には書名までを定めていたことがわかる。つまり、この作業には、当時多く存在していた異本を整理し、定本ともいうべき新しいテキストを定める意図があったと考えられる。[注十一] さらに『別録』に記された、校訂作業に用いられた異本の篇数と完成した新しいテキストの篇数を比べれば、劉父子の校訂前後で典籍のあり方は一変したということがいえる。[注十二] であるから『七略』の百八十年前に帛書の形で存在していた四篇を、単に篇数の一致という点のみから『黄帝四経』に同定するのは無理があると言わざるをえない。「帛書四篇」は、定本が存在せず、抄写によって書物が伝わっていた当時の資料である。そもそも劉氏校訂以前の資料である「帛書四篇」を『漢書』藝文志の枠に当てはめようとすることにも問題があるように思える。

以上から、「帛書四篇」を『漢書』藝文志の『黄帝四経』に同定することにはやや無理があることが明らかになった

と思われる。

三、「帛書四篇」と「黄帝書」

そもそも「黄帝書」はいつ頃出現したものなのか。『史記』に「竇太后、黄帝・老子の言を好み、帝及び諸竇、黄帝・老子を讀み其の術を尊ばざるを得ず」（外戚世家）とあることから、漢初には確かに宮廷内で黄帝に関する書物が広く読まれていたことがわかる。しかし、それらが『漢書』藝文志に整理されたとおりのものとして存在していたかはすでに検討したように疑わしい。では、当時の黄帝に関する書物はどの程度まとまっていたものなのだろうか。

藝文志所掲の道家類の「黄帝書」は全て散逸しており、手がかりとしては、ただ諸資料に散見する「黄帝言」があるのみである。[注十三]『呂氏春秋』や『淮南子』等には「黄帝曰」や「黄帝書曰」で始まるいわゆる「黄帝言」が引かれている。

- 「黄帝有言、曰、上下一日百戰」（『韓非子』揚權）
- 「黄帝言曰、聲禁重、色禁重、衣禁重、味禁重、室禁重」（『呂氏春秋』去私）
- 「黄帝曰、芒芒昧昧、因天之威、與元同氣」（『呂氏春秋』應道）
- 「黄帝曰、四時之不正也、正五穀而已矣」（『呂氏春秋』審時）
- 「黄帝曰、芒芒昧昧、從天之道、與元同氣」（『淮南子』繆稱）
- 「黄帝曰、芒芒昧昧、因天之威、與元同氣」（『淮南子』泰族）
- 「黄帝書曰、形動不生形而生影、聲動不生聲而生響、无動不生无生有」（『列子』天瑞）

このうち「黄帝書」と明言して引用するのは『列子』のみであり、『列子』成立の時期には「黄帝書」が存在していたことがわかる。しかし『列子』の成立には問題があり、現段階においては、そこから「黄帝書」の成立を論ずることはできない。[注十四]その他は戦国末から漢初に成立した資料であるが、どれも「黄帝書曰」ではなく「黄帝有言」または「黄帝曰」としている。また「帛書四篇」以降の資料である『淮南子』も「黄帝曰」としている。このことから「黄帝書」の成立はかなり遅いと思われ、[注十五]竇太后の当時もまだ十分まとまっていなかったと想像できる。あるいは「黄帝書」は劉向の校訂作業によってはじめて『漢書』藝文志のようなかたちにまとまったのかもしれない。

以上をふまえて「黄帝書」と「帛書四篇」との関係はど

のように考えられるだろうか。

「帛書四篇」の抄写年代は、西暦紀元前一九四年～前一八〇年頃と推定されており、これは陳氏の指摘通り漢初の宮廷内で「黄老」が流行していた時期にほぼ一致する。しかし、すでに述べたとおり四篇中には黄帝は「十六経」にしかあらわれない。四篇のまとまりはどのように考えるべきなのだろうか。陳氏は四篇を一時一人の作であるとしている。一方、金谷治「古佚書「経法」等四篇について」[注十六]は、ひとつのまとまった資料として扱うことは認めているものの、四篇の成立を別々と考えている。四篇が本来ひとつの著作かどうかを考えるには、その内容の吟味が必要となるのは言うまでもないが、しかしそれらの体裁の違いも無視することはできないだろう。陳氏も認めているが「帛書四篇」の体裁はかなり異なっている。

各篇の末尾には、

經法凡五千

十六經四千□□六

稱千六百

道原四百六十四

のように篇名と総字数があげられているが、各々の分量にはかなりの差が見られる。特に、最後に置かれている「道原」は「経法」の十分の一程度である。四篇が分量の違いにもかかわらず同じ比重をもって並べられているのは、一人の手により統一的に作成されたものではないことを示しているのではないか。

各篇は分章の様式も異なる。「経法」「十六経」では、章の最後に、章名と「■」（黒い四角）が置かれる。ところが「称」では「■」は用いられず、章名もなく、ただ段落毎に「・」（黒い圏点）で区切られている。「道原」では「■」も「・」も使われない。

「十六経」は十五の章からなっているが、最終章は途中で途切れていて、章名もない。「十六経」という篇名からすると、十五番目の章の途中からと十六番目の章が抜け落ちていると考えられるが、帛書では「称」「道原」が続いて写されている。これも「帛書四篇」が、それぞれ別々の資料から抄写されていることを示すものではないだろうか。

「称」の段落が「・」によって分けられていることはすでに述べたが、帛に破損部分があるため、本来いくつの段落があったかは不明である。今確認できるかぎりにおいては、全部で五十四の部分に分かれている。段落毎の字数を見てみると、少ないもので九文字、多いもので百六十七文字あり、かなりのばらつきがある。

「称」には箴言やことわざのようなものが多く含まれているが、これは竹簡や木簡などから編者が意に沿うものを抜き書きしたか、簡の断片を集めたものと考えるべきものではないだろうか。一枚の簡の文字数は簡の大きさなどによって、少ないもので八字、多いものでは八十字もあるといわれる。[注十七]「称」の字数のばらつきも依拠した簡の種類によって生じたものではないだろうか。帛という抄写素材の性質からして、異簡資料がひとつにまとめられたということも十分にありうるだろう。[注十八]

以上から「帛書四篇」は、体裁の上からは、本来まとまったひとつの著作とは考えにくく、四篇の結びつきは、帛に抄写される段階で初めて生じたと考えられることが明らかになった。であれば、四篇については、それらがひとつの帛に写された動機、すなわち思想上の契機からの考察も必要となるであろう。しかし、ここでは、まずは体裁上から「帛書四篇」はまとまったひとつの著述であった可能性は低いということを確認するにとどめておきたい。

すでにみたとおり漢初に宮廷内で読まれていた黄帝に関する書物はあまりまとまったものではなかったと思われ、その完成度は「帛書四篇」の程度のものだったと考えてもよいと思われる。

このような結果をもとに、次に「帛書四篇」と「黄老」との関係について考えてみることにする。

四、「帛書四篇」と「黄老」との関係

「黄老」という語は『史記』に初めて見える語で、帛書発見以前の「黄老」研究は『史記』を中心資料として行われてきた。『史記』の「黄老」に関する記述は、次の三点にまとめることができる。

(1)「黄老」が漢初の宮廷内、高臣においてひろく流行していたというもの。

・「(曹參)膠西に蓋公有り、善く黄老の言を治むるを聞き、人をして幣を厚くして之を請わしむ。既に蓋公に見ゆ。蓋公爲に言わく、治道は清静を貴ぶ、而して民自ら定まる、と。…其の治要は黄老の術を用う」

(曹相国世家)

・「竇太后、黄帝・老子の言を好む。帝及び太子、諸竇、黄帝・老子を讀み、其の術を尊ばざるを得ず」

(外戚世家)

(2)先秦諸子中には「黄老」に基づくものがいるというもの。

・申不害について「申氏の學は黄老に本づき刑名を主と

せり」　（老荘申韓列伝）

・韓非について「刑名法術の學を喜む、而して其の歸は黄老に本づく」　（同右）

・慎到、田駢、接子、環淵について「皆黄老道德之術を學ぶ」　（孟荀列伝）

(3)「黄老」には学統があるというもの。

・「樂巨公は黄帝・老子を學ぶ、其の本師は號して河上丈人と曰う。其の出づる所を知らず。河上丈人は安期生に教え、安期生は毛翕公に教え、毛翕公は樂瑕公に教え、樂瑕公は樂巨公に教え、樂巨公は蓋公に教う。蓋公は齊の高密・膠西にて教え、曹相國の師と爲る」　（樂毅列伝）

このような『史記』の記述は、いずれも「黄老」という思想・政術が存在したことを告げるのみで、その内容を具体的に明らかにするものではない。特に「黄」に関する「黄帝書」が散逸しているうえに、黄帝のイメージには様々な要素があったために、これまでの「黄老」像も幅のひろいものであった。[注十九]

ここでは『史記』の記述を中心に結ばれてきた、帛書四篇出土以前の「黄老」像のうち、最も一般的であった金谷治『秦漢思想史研究』の「無為清静を標榜し、その実践を意図する実務派の道家」という見方について検討してみる。[注二十]

金谷氏は、(1)から「黄老」には強い政治的意図があり、また「黄老」と関係づけられた高臣たちの政治姿勢からその根本に「無為にして治める」という姿勢があったとする。また、(2)の先秦の諸子と「黄老」との関連については、「黄老」が『史記』において初めてみえる語だということから、司馬遷が、漢代当時の用語でそれ以前の思想家たちの傾向を論じたもので、必ずしも彼らが「黄老」に属していたということにはならないと考えた。しかし、彼らが何故『史記』において「黄老」とみなされたのかについては、それ以上の考察は行っていない。(3)の学統についても、(2)と同様、先秦の文献に「黄老」の実在を思わせる資料が見あたらないことから、これを全面的には信用をせず、「黄老」の創始者を楽巨公と考え、斉国に黄帝信仰の伝統があったことから考え合わせて、「黄老」は戦国最末期に斉国で興った政治思想であったと結論づける。この説は妥当な見解だと思われるが、『老子』や道家との関連から「黄老」像を結ぼうとするあまりに、韓非を代表とする法家の思想家が『史記』において「黄老」とみなされていることまでは説明ができなかった。[注二十一]

では「帛書四篇」発見以降「黄老」の像はどのように変

わったのであろうか。

まず「帛書四篇」では「道、法を生ず」(「経法」道法)のように、道家的な「道」と法家の「法」を折衷する思想が顕著なことから、実は「黄老」の最大の思想的特徴はまさに道法折衷思想にあると考えられるようになり、そこから『史記』で法家系の思想家が「黄老」とされていたことが説明されるようになった。[注二十二] 道法思想を有する「黄老」像が「帛書四篇」によって新たに形成されたのである。しかし、一方、「黄老」をあくまで漢代道家の総称と考え、「帛書四篇」は「黄老」の本流ではなく、道法家とよぶべき道家内の一支派の著作にすぎず、[注二十三]「黄老」と直接関係しないという説も依然として存在する。

「黄老」の起源については、『史記』の記述をどこまで信用するかによって結論が異なる。『史記』の記述を全面的に信用すれば、戦国中期ということになり、『管子』四篇に先行することになる。[注二十四] 一方「黄老」という語が先秦諸子の著作には見られないということを重くみれば、戦国末期ということになる。例えば、浅野裕一『黄老道の成立と展開』[注二十五]は、『史記』の「黄老」の学統に関する記述のうち、楽巨公以降を信用し、紀元前二百五、六十年前後には、「黄帝書」と『老子』が結びついた形で、斉の地において「黄老」学派が存在していたとする。

また「帛書四篇」の成立時期についても説は分かれ、戦国中期から漢初に至るまでの約二百年の開きがあり、成立地域については、楚、越、斉などの説が出されている。

以上から「黄老」と「帛書四篇」の関係が完全に解明されているとはいえない現状が明らかであろう。結局、「帛書四篇」と「黄老」の関係は、どちらか一方が他方を計る絶対的基準とはなりえないので、両者を比較検討することで、お互いの位置を決定していくしかない。両者の評価の定まらぬ大きな原因のひとつはそこにあるとおもわれる。では、どのように解釈すれば互いにうまく説明しあうことができるのであろうか。

まず「黄老」は道家の総称と考えることはできない。「黄老」が漢代の道家の総称だとすれば『史記』において韓非などが「黄老」とされたことが説明できなくなる。『史記』では荘周を「黄老」とはしていない。その一方で『史記』で「黄老」とされている慎到は『荘子』天下篇では道家とみなされていて、さらにその著作とされる『慎子』は『漢書』藝文志では法家類に入れられている。これは慎到の主張が道家とも法家ともとれたことをしめすものだろう。であるから『史記』中の「黄老」は道家の総称ではなく、道

家と法家の接近したものを指していたと思われる。

さらに、帛書には『老子』乙本と、道法思想を説く四篇とが一緒に置かれていることからすると、「帛書四篇」が「黄老」と関係のある資料であることは確実としてよいだろう。四篇の性格を説明するために道法家なる新しい枠組みを敢えて設定する必要もない。

また、「黄老」という語が『史記』以前の資料に見られないこと、「黄帝書」の成立が遅いと思われることから考えれば、「黄老」の成立も、戦国中期までさかのぼることはできないだろう。「黄老」の系譜に関する記述で最も確実なのは、蓋公と曹参の記事だということを考えあわせれば、「黄老」の祖型的思潮はそれ以前からあったであろうが、その隆盛は比較的遅いと考えられ、「黄老」という名称自体も、秦末から漢初にかけて生まれたものであったと思われる。そのことは「帛書四篇」の体裁が、必ずしもよくまとまっているとはいえないことからも頷けるのではないか。当時、隆盛をむかえつつあった「黄老」という思潮のもと、それ以前の資料を利用し、まとめる形で「帛書四篇」のような資料が多く作られていたと思われる。[注二十六]

五、まとめ

これまでの検討により、「帛書四篇」を『漢書』藝文志の『黄帝四経』やそのほかの「黄帝書」に同定する事はできないことが明らかになったと思われる。

また「帛書四篇」は、帛に抄写される段階で初めてひとつにまとめられたとも考えられた。従来の研究では「帛書四篇」はひとつのまとまった資料として扱われてきた。「帛書四篇」を「黄老」という点でひとまとめにして扱うことはもちろん可能である。しかし四篇の成立までをひとつに考えるのには問題があろう。四篇の成立についての従来の見解に、戦国中期から漢初まで約二百年の開きが見られるということが、逆に四篇が一時にできたものではないということを物語っているのではないだろうか。「黄老」そのものの成立は新しいと考えられ、四篇の成立もそれにともなうものではあろうが、その思想の祖型的内容までを遅いと考える必要は必ずしもない。古い文献から自分たちの意に沿う部分を取り出してまとめることは十分に考えられるし、その際に多少の潤色を加えまとめることもあるだろう。

「帛書四篇」は「黄老」と関係を持つ資料であるが、各篇の成立にはそれぞれ別の由来も存在すると考えるべきものである。そのような前提のもとに、四篇の相違点に注目

していくことで「黄老」成立の過程がより一層明瞭に浮かび上がってくるのではないだろうか。

注一　このことは四篇の釈文が数多く出版されていることからもわかる。「帛書四篇」の釈文には「長沙馬王堆漢墓出土《老子》乙本巻前古佚書釈文」(『文物』一九七四年第七期)、『馬王堆漢墓帛書【壱】』(文物出版社、一九八〇年)、「《老子》乙本巻前古佚書釈文」(『考古学報』一九七五年第一期)、『馬王堆漢墓帛書・経法』(文物出版社、一九七六年)、厳一萍編『帛書竹簡』(台湾藝文印書館、一九七七年)、『馬王堆漢墓帛書【壱】』(文物出版社、一九八〇年)、『中国哲学史資料選輯・先秦之部』(中華書局、一九八四年)などがあり、このほか後述の余氏書、陳氏書にものせられている。

注二　「黄老」研究史については、菅本大二「馬王堆漢墓のその後の研究動向」(『新しい漢文教育』第五号、一九八七年)に詳しい。

注三　羅福頤「座談長沙馬王堆漢墓帛書」(『文物』一九七四年第九期)は「十六経」のみを『漢書』藝文志陰陽家類の『力牧』十五篇とする。高亨・董治安「《十大経》初論」(『歴史研究』一九九五年第一期)は「十六経」のみを『漢書』藝文志道家類の『黄帝君臣』十篇とする。

注四　例えば、内山俊彦『中国古代思想史における自然認識』附録「馬王堆帛書〈経法〉〈十六経〉〈稱〉〈道原〉小考」(創文社、一九八七年、もと『東方学』五六号、一九七八年)は、四篇を戦国末より前漢初頭に至る間のほぼ同じ時期に、相互の密接な交渉のもとに(おそらく同一学派内において)あいついで成立したものとし、四篇は一体を為す資料として扱うことが可能かつ適切であるとしている。

注五　龍晦「馬王堆帛書〈老子〉乙本巻前古佚書探源」(『考古学報』一九七五年第九期)は楚国説、王博「論《黄帝四経》産生的地域」(『道家文化研究』第三輯、一九九三年)は戦国中期以前越国説、鍾肇鵬「黄老帛書的哲学思想」(『文物』一九七八年第二期)は戦国末期斉国説を提出している。

注六　『文物』(一九七四年第十期)所収。唐氏は「馬王堆出土《老子》乙本巻前古佚書的研究」(『考古学報』一九七五年第一期)においても、同様の見解を示している。

注七　王博「《黄帝四経》和《管子》四篇」(『道家文化研究』第一輯、一九九二年)や、余明光『黄帝四経今注今訳』(岳麓書社、一九九三年)のように「帛書四篇」を『黄帝四経』としているものが多く見られる。

注八　『黄帝四経今註今訳』(台湾商務印書館、一九九五年)所収。

注九　原文では「這四篇在思想上是一個整體」としている。

注十　「長沙馬王堆漢墓帛書概述」(『文物』一九七四年第九期)において、「帛書四篇」と同時に抄写されている『老子』乙本の避諱の状況から推定されている。

注十一　武内義雄『支那学研究法』第三「目録学」四「解題」(『武内義雄全集』第九巻、角川書店、一九八一年、もと東京岩波書店、一九四九年)参照。

注十二　例えば『晏子』八篇を校定するのに、十一篇本、五篇本、一篇本、十三篇本の四種のテキストを参照し『管子』八十六篇を校定するのに、三百八十九篇本、二十七篇本、四十一篇本、十一篇本、九十六篇本の五種類のテキストを参照している。

注十三　「黄老言」は、『呂氏春秋』六条、『韓非子』一条、『列子』六条、『淮南子』二条、『荘子』六条、『新書』二条ほどみられる。

注十四　『列子』成立には、馬叙倫『列子偽書考』、武内義雄『列子冤詞』以来、論議がある。

注十五　金谷治『秦漢思想史研究』第二章「漢初の道家思潮」第三節「黄老の術について」（日本学術振興会、一九六〇年）参照。

注十六　『加賀博士退官記念中国文史哲学論集』（講談社、一九七九年）所収。

注十七　銭存訓『中国古代書籍史』第五章「竹簡と木簡」（法政大学出版、一九八〇年、中国語版一九七五年）。

注十八　『老子』甲本巻後古佚書も四篇からなっているが、必ずしも一体をなす資料とはみなされていない。

注十九　木村英一『老子の新研究』附録「黄老から老荘及び道教へ」（創文社、一九六八年）は黄老を戦国末より秦漢にかけての道家が自説の強化と権威の確定のために黄帝との連結を謀ったものとしているが、内容的には老荘とほぼ同じものとしており、これは、津田左右吉『道家思想とその展開』第四篇「道家の思想の展開」第七章「新傾向」『津田左右吉全集』第十三巻、一九六三年、もと岩波書店、一九三九年）以来の伝統的な見方であるといえる。また、内山俊彦「漢初黄老思想の考察」（『山口大学文学会志』第十三・四巻、一九六二・三年）は養性術、兵家との関連を指摘する。

注二十　金谷治『秦漢思想史研究』第二章「漢初の道家思潮」第三節「黄老の術について」参照。

注二十一　金谷治『秦漢思想史研究』に「それ（韓非と黄老）は結局似ているというただそれだけのことで、法家の法治主義と道家の無為の思想とでは実は本質的な相違がある」（一七二頁）とある。

注二十二　帛書発見以前、岩佐昌暲「黄老派の輪郭」（『懐徳』四十一輯、一九七〇年）は、『史記』にいう黄老は法家に近く、純粋の道家思想を継ぐ道徳とは区別されていたとしていたが、このことは浅野裕一「道法を生ず～道法思想の展開～」（『島根大学研究紀要』、一九八二年）でさらに明らかになった。

注二十三　例えば、裘錫圭「馬王堆帛書《老子》巻前古佚書与〈道法家〉」（『中国哲学』第二輯、一九七九年）、齋木哲郎「黄老思想の再検討」（『東方宗教』六十二号、一九八三年）など。

注二十四　陳氏前掲論文参照。

注二十五　『黄老道の成立と展開』第一部「黄老道の形成」第十七章「黄老道学派の成立」（創文社、一九九二年）もと「道家思想の起源と系譜」（『島根大学研究紀要』、一九八〇年）参照。

注二十六　「帛書四篇」とその後の『老子』乙本は全幅の帛に写されており経典視されていたと思われることからも、当時「黄老」が隆盛しつつあったと考えられる。

（筑波大学大学院）